

メディア特性の理解の現職教員と大学生の比較

Comparison of Understanding of Media characteristics In-service teacher and University students

後藤 康志

Yasushi Gotoh

新潟大学 教育・大学生支援機構

Institute of Education and Students Affair, Niigata University

〈あらまし〉 メディア特性の理解はメディア・リテラシーの重要な構成要素と考えられる。メディア特性を信頼性、速報性、嗜好性、簡便性、検索性と捉え、「仕事や学習に役立つ最新の情報を得る」という文脈においてどの特性を優先するかを検討した結果、信頼性より嗜好性や簡便性を優先するといった具合に個人差があることが示唆されている。このような個人差が生じる原因として、「仕事や学習に役立つ最新の情報を得る」状況に置かれた経験の有無という観点から現職教員と大学生の比較を行った。結果として、メディア接触と利用目的には差異がみられたものの、メディア特性には顕著な差が見られなかった。

〈キーワード〉 メディア・リテラシー 批判的思考 メディア認知 メタ認知的知識
高等教育 質保証

1. はじめに

1.1. メディア特性の理解とメディア・リテラシー

知識基盤社会において、人材育成はますます重要である。高等教育における質保証、すなわち学士としての求められる資質能力を確実に身につけさせる教育の実施が必要である。

平成 24 年 6 月、文部科学省は大学教育改革実行プランを発表し、社会が求める人材像として「主体的に学び、どんな状況にも対応できる人材」を挙げ、そのような人材育成のために大学教育に求められることとして「答えのない問題」を発見し、最善解を導くために必要な専門的知識及び汎用的能力を鍛えることを挙げている（文科省,2012）。汎用的能力は学士力答申においては知的活動でも職業生活や社会生活でも必要な技能と性格づけられている。

高等教育においては、各専門分野の専門性を超えて、問題解決能力やメディア・リテラシーといったジェネリックスキルを教育目標として明示する例が増えてきている。新潟大学には 42 の主専攻プログラムがあり、それぞれに到達目標を設定しているが、これらの内容分析を行った調査（後藤, 2011）によると言は微妙に違うものの論理的思考力、問題解決力、課題や現状を把握する能力の育成

をある程度共通に意図していることが示唆されている。

本研究の関心はメディア・リテラシー育成にあるが、その中でも学士課程教育を修了した学士がもつべきメディア・リテラシーとは何かに焦点を当てる。いいかえると、市民生活に必要なメディア・リテラシーのみならず、その発展としての専門的な職務や研究において必要な高次な批判的思考を組み込んだメディア・リテラシーの育成を目指す。

筆者はメディア・リテラシーの構成要素を主体的態度、メディア操作スキル、メディア特性の理解、メディアに対する批判的思考に分け、その構造を検討している。構造方程式モデリングの結果、「メディアから主体的に情報を得ようとする者はメディア操作スキルが高くなり、それがメディア特性の理解が深まりに影響し、メディア特性の理解がメディアに対する批判的思考に影響するというモデルを作成した（後藤,2006）。イギリス教育省は自らのメディア選択の特徴を説明できることがメディアに対する批判的思考と関係することを指摘しており（DCMS 2001）、メディア特性の理解を踏まえて自らのメディア行動を省察することが必要である。

メディア特性に関しては先有知覚研究が

あり (Clark,R.E,1983;Krendle,K.A,1986;佐賀, 1983;佐賀,1993;白,1992;今井 1993;)、筆者も受信のみでなく発信を考慮したメディア特性として簡便性 (情報を得やすい)、信頼性 (情報の信頼性が高い)、速報性 (情報が新しい)、嗜好性 (使うのが好き) を取り上げて、検討してきた後藤・生田,1999)。最近多くの人が検索エンジンを使って情報を得ようになっており、検索性 (情報を検索しやすい) という特性が重要となろう。

1.2. メディア特性の理解の個人差

このような問題意識から、筆者は学習者のメディア特性の自己理解の意識化を組み入れた批判的思考力育成プログラムの開発した

(後藤,2012a)。具体的には、メディア特性の理解を可視化するために階層分析法

(AHP: Analytic Hierarchy Process) を取り入れた。具体的には、検索性、速報性、簡便性、信頼性、嗜好性以上をメディア特性と捉え、利用できるメディアを Web, 図書, テレビ, 新聞, Twitter & Facebook に限定し、「仕事や学習に役立つ最新の情報を得る」という目的において実際に活用するメディアをとしたとき、を大学生がどれほど重視するかを調査した。結果として、平均的には信頼性を重視するものの、大学生個々のデータを見ていくと、信頼性に重きを置く大学生だけでなく、極端に簡便性を重視する大学生も見られるといった具合に個人差が大きいことがわかった。(Gotoh,2012;後藤 2012b;2012c;2012d)。

業務や研究、学習で資料収集するという場面において最も重要と認知されているのは信頼性であるが、高い信頼性を求める学習者は、簡便性、嗜好性のプライオリティが相対的に低くなり、信頼性にプライオリティを置かない学習者は簡便性や嗜好性が相対的に高い。この傾向は比較的安定した結果として得られた。暫定的ではあるがメディア特性の理解を信頼性重視タイプと、簡便性・嗜好性重視タイプに類型化できるとも考えられる (後藤 2012e)。

メディア・リテラシー育成を考えた場合、簡便性・嗜好性重視タイプの大学生が結果で

情報収集の方法や考え方を修正できるよう仕組んでいく必要があるが、簡便性・嗜好性重視タイプの大学生がどのような属性をもつのかをまず明らかにする必要があると考える。

そこで、このような個人差が生じる原因として、まずは「仕事や学習に役立つ最新の情報を得る」状況に置かれた経験の有無が関係しているのではないかと考えた。筆者の一連の研究で目指しているのは、学士課程教育を受けたものにどのレベルのメディア・リテラシーを保証するのかを明らかにすることであり、「仕事や学習に役立つ最新の情報を得る」という設定は大学生が社会や大学院修士課程で直面するであろう状況を想定したものである。しかし、多くの大学生にとって、このような状況設定のイメージができない可能性がある。一方、現職教員であれば、このような状況に置かれることも多く、簡便性や嗜好性よりも信頼性を優先するなど異なるであろう。

さらに、日常のメディア接触が上記の経験とは別に作用している可能性を考えられる。例えば、メディアを娯楽目的で利用する頻度が高い者と、情報収集や教養を得る目的で利用する頻度が高い者では、何かしらの違いがある可能性もあろう。

このように、メディア特性の理解の差を経験及びメディア接触により比較することが、メディア・リテラシー育成のための基礎的知見を提供することが考えられる。そこで、現職教員と大学生の比較を行い、経験の有無による差異を明らかにしたい。一方、メディア接触による比較のためには多くのサンプルが必要になることから、今回の報告では現職教員と大学生のメディア接触による比較に留める。

2. 目的

「仕事や学習に役立つ最新の情報を得る」という目的において、検索性、速報性、簡便性、信頼性、嗜好性といったメディア特性の優先度及びメディア接触が、現職教員と大学生で異なるかを明らかにする。

3. 方法

3.1. 対象及び調査時期

対象は現職教員 25 名及び N 大学の大学生 86 名である。調査期間は 2012 年 8 月 16 日及び 2012 年 12 月 8 日である。

3.2. 分析

3.2.1. メディア接触

まず、頻度について図書、Web、テレビ、新聞、雑誌について調べた。

頻度は、NHK 放送文化研究所及び東京大学学際情報学環を参考に項目を作成した。具体的には図書については①ほとんど読まない、②1ヶ月1,2冊、③1ヶ月3冊から5冊、④1ヶ月5冊以上の4件法、Webについては①ほとんど見ない、②1日に10分くらい、③1日11分から30分くらい、④1日31分～1時間くらい、⑤1日1時間以上の5件法、テレビについては①ほとんど見ない、②1日30分以下、③1日30分～1時間、④1日1時間～3時間、⑤一日3時間以上の5件法、新聞については①ほとんど読まない、②1日5分以下、③1日6分から15分くらい、④1日16分から30分くらい、⑤1日31分以上の5件法、雑誌については①ほとんど読まない、②1ヶ月1～2冊、③1ヶ月3～5冊、④1ヶ月6冊以上の4件法で調査する。

次に利用目的について、それぞれ①趣味や娯楽のため、②教養のため、③役立つ情報を得るためのうち、当てはまるものすべてについて選択してもらった。

3.2.2. メディア特性の理解

具体的には図1の通り目的から見た基準の対比較を行う(高萩・中島, 2005)。

図1. 基準の対比較

Q1「仕事や学習のために必要な最新の情報を得る」という観点からいうと、

		とても左のほうが大 切	やや左のほうが大 切	どちらともいえない	やや右のほうが大 切	とても右のほうが大 切	
1	速報性がある	1	2	3	4	5	信頼できる
2	速報性がある	1	2	3	4	5	情報が得やすい
3	速報性がある	1	2	3	4	5	好き
4	速報性がある	1	2	3	4	5	検索できる
5	信頼できる	1	2	3	4	5	情報が得やすい
6	信頼できる	1	2	3	4	5	好き
7	信頼できる	1	2	3	4	5	検索できる
8	情報が得やすい	1	2	3	4	5	好き
9	情報が得やすい	1	2	3	4	5	検索できる
10	好き	1	2	3	4	5	検索できる

目的を「仕事や学習のために必要な最新の情報を集めるため」、基準を検索性、速報性、簡便性、信頼性、嗜好性、代替案を Web、図書、テレビ、新聞、Twitter & Facebook とする階層分析法を行う。

次に、固有値法により一対比較表から各基準及び各代替案のプライオリティを計算する。表では、幾何平均法による近似値を用いている。

表1. 各基準のプライオリティ(重み)

	速報性	信頼性	簡便性	検索性	嗜好性	権	その他	確保
速報性	1	0.5	5	2	3	3	1.245731	0.221272
信頼性	2	1	2	7	3	7	1.888179	0.338725
簡便性	1	0.5	1	0.5	3	3	0.23	0.544365
検索性	0.5	0.5	2	1	3	1.5	1.084477	0.192542
嗜好性	0.33	0.33	0.33	0.33	1	0.011859	0.411916	0.079665
権							5.574284	1

AHPにおいては、代替案(メディア)についても一対比較とプライオリティの算出を行った後、各代替案のプライオリティ(評価値)を基準のプライオリティ(重み)で重みづき平均をとり総合評価値とする。

3.2.2. 現職教員と大学生の比較

まず、基準のプライオリティについて、後藤(2012e)のような信頼性が重視され、信頼性を重視するほど他の基準は相対的に重視されない関係にあるか確認する。

次に比較であるが、メディア接触(頻度、目的)について、カイ二乗検定を行い比較する。

次に、各基準のプライオリティ及び代替案(メディア)のプライオリティを測定とし、平均値の差の検定を行い比較する。

4. 結果

4.1. メディア接触

4.1.1. 図書

図書について、接触度及び利用目的をまとめて表にしたのが表2及び表3である(表中の数値はパーセント、調整済み残差が1.96を超える場合については太字)。

図書については接触が5%水準で有意な差があり、現職教員の方が大学生よりも図書への接触が多い。利用目的は娯楽、教養では差がないが、情報収集目的では現職教員の方が大学生よりも多く図書を利用する傾向が高く、72%であるのに対して、大学生は27%にとど

まっている。

表 2 図書の接触 (単位は%)

図書接触	殆ど読まない	月に1から2冊	月に3から5冊	月に5冊以上
教員	12	56	16	16
学生	33	50	14	3

表 3 図書の利用目的 (単位は%)

読書娯楽	非選択	選択
教員	12	88
学生	19	81
読書教養	非選択	選択
教員	48	52
学生	49	51
読書情報**	非選択	選択
教員	28	72
学生	73	27

4.1.2. Web

Web について、接触度及び利用目的をまとめて表にしたのが表 4 及び表 5 である (表中の数値はパーセント, 調整済み残差が 1.96 を超える場合については太字)。

大学生が現職教員に対して Web 接触が多く, 現職教員は 1 日 10 分以下閲覧が半数であるのに対して大学生は 10% 程度であり, 1 日 1 時間以上閲覧する大学生が 4 割に近い。

一方, 利用目的で見ると, 大学生は娯楽目的が多いのに対して, 現職教員は情報収集目的が多い。

表 4 Web の接触 (単位は%)

WEB接触	殆ど見ない	一日10分	1日11分~30分くらい	1日30分から1時間	1日1時間以上
教員	28	20	28	16	8
学生	10	3	24	23	38

表 5 Web の利用目的 (単位は%)

WEB娯楽	非選択	選択
教員	44	56
学生	13	87
WEB教養	非選択	選択
教員	88	12
学生	77	23
WEB情報	非選択	選択
教員	4	96
学生	30	70

4.1.3. テレビ

テレビについて、接触度及び利用目的をまとめて表にしたのが表 6 及び表 7 である (表中の数値はパーセント, 調整済み残差が 1.96 を超える場合については太字)。

テレビ視聴については教員が 1 日 30 分~1

時間が最も多く, 大学生は 1 日 1 時間~3 時間が最も多いものの, 統計的に有意な差は見られない。利用目的も同様であるが, 娯楽, 情報収集, 教養の順である。

表 6 テレビの接触 (単位は%)

TV接触	殆ど見ない	1日30分以下	1日30分~1時間	1日1時間~3時間	1日3時間以上
教員	8	24	40	28	0
学生	17	16	22	35	9

表 7 テレビの利用目的 (単位は%)

TV娯楽	非選択	選択
教員	20	80
学生	13	87
TV教養	非選択	選択
教員	64	36
学生	84	16
TV情報	非選択	選択
教員	48	52
学生	41	59

4.1.4. 新聞

新聞について、接触度及び利用目的をまとめて表にしたのが表 8 及び表 9 である (表中の数値はパーセント, 調整済み残差が 1.96 を超える場合については太字)。

現職教員の新聞接触が大学生よりも有意に高いものの, 利用目的においては有意な差は見られず, 情報収集, 教養のために新聞を購読する傾向が見られた。

ここでは大学生の新聞接触が少なく, 1 日 5 分以下が 9 割を超える。これは NHK 放送文化研究所による調査に近いものであり, 下宿生が多いことが影響しているかも知れない。

表 8 新聞の接触 (単位は%)

新聞接触	殆ど読まない	1日5分以下	1日6分~15分	1日16分~30分くらい	1日31分以上
教員	28	24	36	12	0
学生	77	14	7	1	1

表 9 新聞の利用目的 (単位は%)

新聞娯楽	非選択	選択
教員	84	16
学生	91	9
新聞教養	非選択	選択
教員	48	52
学生	51	49
新聞情報	非選択	選択
教員	24	76
学生	29	71

4.1.5. 雑誌

雑誌について、接触度及び利用目的をまとめて表にしたのが表 10 及び表 11 である（表中の数値はパーセント，調整済み残差が 1.96 を超える場合については太字）。

現職教員と大学生の接触，利用目的とも有意な差は見られなかった。雑誌購読はほとんど読まないがいずれもほぼ半数，残り半数が 1ヶ月に 1 から 2冊である。利用目的は娯楽，情報収集が多いものの，差は見られなかった。

表 10 雑誌の接触（単位は％）

雑誌接触	殆ど読まない	1ヶ月1~2冊	1ヶ月3~5冊	1ヶ月6冊以上
教員	48	48	4	0
学生	45	50	3	1

表 11 雑誌の利用目的（単位は％）

雑誌娯楽	非選択	選択
教員	32	68
学生	19	81
雑誌教養	非選択	選択
教員	84	16
学生	95	5
雑誌情報	非選択	選択
教員	52	48
学生	59	41

以上をまとめると，図書，新聞については現職教員の方が大学生よりもよく利用し，Web については大学生の方がよく利用する。目的で見ると，現職教員の方が図書及び Web を情報収集目的で利用することが多く，大学生は Web を娯楽目的で利用することが多い。これは，現職教員の方が業務上，メディアを情報収集目的で利用した経験に豊富であろうと考えたことを支持する結果であった。

テレビ，雑誌については現職教員と大学生の差が見られなかった。

4.2. メディア特性の理解の構造の確認

次に，メディア特性の理解の構造を確認するために基準のプライオリティの相関分析を行った（表 12 及び表 13）。

信頼性は最も寄与が大きく（図 2），表 12 に示すとおり現職教員では簡便性，検索性において有意な負の相関があり，現職教員に

いては嗜好性にも-.33 の負の相関があり 5%水準では有意にならないものの，全体としては信頼性と他の特性とは顕著なトレードオフの関係があることが見て取れる。

大学生では表 13 に示すとおり速報性，簡便性，嗜好性，検索性すべてにおいて 5%水準で有意な負の相関がある。このことから，得られたデータでは信頼性を優先するほど他の特性を優先しないというこれまでのデータを指示する結果が得られた。

表 12 基準の相関分析（現職教員）

	信頼性	速報性	簡便性	嗜好性	検索性
信頼性	1	0.017	-.638**	-0.332	-.616**
速報性		1	-0.033	-0.378	-0.218
簡便性			1	-0.102	0.067
嗜好性				1	-0.015
検索性					1

表 13 基準の相関分析（大学生）

	信頼性	速報性	簡便性	嗜好性	検索性
信頼性	1	-.294**	-.436**	-.437**	-.407**
速報性		1	-0.118	-0.093	-.222*
簡便性			1	-0.144	0.072
嗜好性				1	-.233*
検索性					1

4.3. 平均値による 2 群の比較

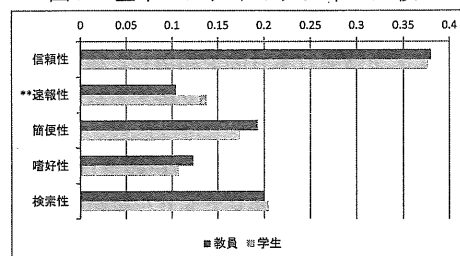
4.3.1. メディア特性による比較

次に，現職教員と大学生それぞれの基準のプライオリティの平均値を t 検定によって検定した結果を図 2 に示す。

まず，優先の順位で見ると現職教員，大学生ともに信頼性が最も高く，次いで検索性，簡便性であり，現職教員はついで嗜好性，速報性，大学生は速報性，現職教員は速報性，嗜好性の順であった。

信頼性と嗜好性，簡便性において差異が見られることを想定したが，信頼性では統計的に有意な差は見られなかった。速報性のみ，大学生の方が優先する傾向がある (**p<.01)。

図 2 基準のプライオリティの比較



4.3.2. メディア×メディア特性による比較

次に、現職教員と大学生それぞれの基準の代替案毎のプライオリティの平均値をt検定によって検定した結果を図3に示す。

現職教員は図書の嗜好性、新聞の嗜好性、新聞の簡便性において有意に高く (** $p < .01$), 大学生は雑誌の速報性 (** $p < .05$), Webの速報性 (** $p < .01$) について有意に高い傾向にある。(図8)。

図3 代替案毎のプライオリティの比較

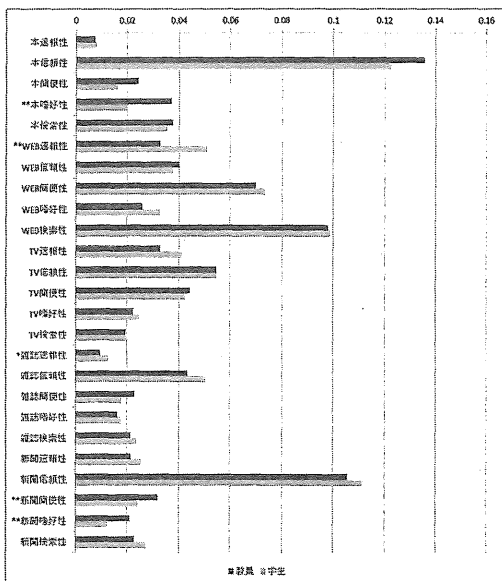


図3. 8 信頼性上位群・下位群の比較

5. まとめと今後の課題

メディア接触については、図書、新聞については現職教員の方が大学生よりもよく利用し、Webについては大学生の方がよく利用する。目的で見ると、現職教員の方が図書及びWebを情報収集目的で利用することが多く、大学生はWebを娯楽目的で利用することが多い。これは、現職教員の方が業務上、メディアを情報収集目的で利用した経験に豊富であろうと考えたことを支持する結果であった。

メディア特性の理解の比較では、まず、優先の順位はほぼ同じであり、信頼性、嗜好性、簡便性において差異が見られることを想

定したが、信頼性では統計的に有意な差は見られなかった。

今回のデータは限られたものであり、更に対象を拡大していく。具体的には、メディア接触及び利用目的による比較検討が可能になるまでサンプル数を増やす必要がある。

他方、メディア特性の理解に影響を及ぼす要因について、他に考慮すべき要因を明らかにするため、文献等も用いて幅広く検討していきたい。

謝辞：本研究の一部は、科学研究費助成事業（基盤研究（C）「メタ認知とパフォーマンス評価を組み入れた高次批判的思考力育成モジュール教材の開発」課題番号24501179：研究代表者後藤康志）による助成により行われている。

参考文献

白南権 (1992) 学習メディアに対する先有知覚の機能に関する研究 日本教育工学雑誌 16(2), 107-117

Clark, R. E. (1983) Reconsidering research on learning from media. *Review of Educational Research*, 53, 445-459

Ennis, R. (1987) A Taxonomy of Critical Thinking Dispositions and Abilities. *Teaching thinking skills: theory and practice*. Edited by Joan Boykoff Baron, Robert J. Sternberg. Freeman.

後藤康志 (2006) メディア・リテラシーの発達と構造に関する研究. 新潟大学提出博士学位論文

後藤康志 (2012a) メディア認知の意識化を組み入れた批判的思考力育成プログラムの開発. 文部科学省科学研究費（基盤研究（C））成果報告書

後藤康志 (2012b) 学習者のメディア特性の理解の類型化の試み. 日本教育メディア学会大会講演論文集, 17-18

後藤康志 (2012c) メディア日記法によるメディア活動の記録. 日本教育メディア学会大会講演論文集, 149-152

後藤康志 (2012d) AHPを用いたメディア特性の理解の可視化. 日本教育工学会研究報告集, JSET12(3): 31-36

後藤康志 (2012e) 学習者によるメディア特性の理解の類型化. 日本教育工学会研究報告集, Vol. JSET12, No. 4, pp. 151-156

Gotoh, Y. (2012) Visualization of understanding of media characteristics using the Analytic Hierarchy Process. *Proceedings of 10th International Conference for Media in Education*

後藤康志・生田孝至 (1999) 受信・発信メディアに対する児童の先有知覚に関する研究. 日本教育工学雑誌, 23: 85-88

今井真悟 (1993) 児童のメディアに対する先有知覚と教師の指導法との関係. 新潟大学修士論文

Krendle, K. A. (1986) Media influence on learning: Examining the role of preconceptions. *Educational Communication and Technology Journal* 34, 223-234

佐賀啓男 (1988) 多メディア利用事態における学習者のメディア知覚と教師の役割. 放送教育開発センター研究報告 9, 95-115

佐賀啓男 (1993) 中大学生のメディアに対する先有知覚の性格と学習. 視聴覚教育研究 23, 55-67